

三月二十九日（水）

薄暗がりの住宅街を、スマホのマップアプリが示すままに歩いて、そろそろ五分。アプリによると左手に広がる公園が、いつも目にする彩都西公園らしい。目の前にはモノレールの高架も見えるが、今のところ出入りする気配がない。

足を止め、横を歩いていたつもりで沙綾を探すと、少し後ろをトボトボ歩いていた。その場で眺めていると、三秒とかわからず、目の前まで来た。自分の足元を見ている彼女に向かって、「どうする？」と投げかけた。

「公園を抜けたら、着くらしいけど」

「帰る前に、お手洗いにいきたいな。ちよつと冷えちゃった」

五分もあれば自宅に帰り着けそうな気がするが、近くにトイレはあつたかな？暗がりの公園でトイレを探すのもイマイチか。どうしたものかとマップアプリに視線を落とすと、道なりに真っ直ぐ行った先、高架の向こうにミニストップがあるらしい。

そういえば、この辺りだつたっけ。少々遠回りになるけど、自宅に向かうよりは近い。公園のトイレよりは何倍もマシだろう。

「もうちよつとだけ我慢してくれよ」

沙綾の横に立ち、彼女の身体を支えながら、歩行を補助する。真っ直ぐ道なりに進むと、さつきは見えなかった看板が、煌々と輝いている。強かに飲んだ後の夜道には、とてもありがたい希望の光。高架を潜つてすぐ、駐車場の広いミニストップに辿り着いた。

沙綾は早々にお手洗いを目指した。運良く空いていたらしく、スムーズに中へ入って行った。僕はそれを見届けて、ドリンクコーナーと栄養剤のコーナーへ向かう。五〇〇mlの水と、ウコンのドリンクをカゴに入れ、ついでお菓子のコーナーで袋入りの森永ラムネを二袋ほど追加した。

レジで会計を済ませていると、いつの間にか沙綾は僕の隣で腕を組もうとしていた。さつきまでトボトボと歩いていた割には、ケロつとした顔をしている。

「炭酸水とか、追加のビールとか入れなくていいの？」

「もう十分飲んだだろ？ お土産のウイスキーはまた今度」

駄々をこねる沙綾は気にせず、ビニール袋に入れてもらった商品を受け取った。一瞬、荷物を沙綾に持たせて自分もトイレを借りようかと思ったが、そちらに目を向けたタイミングで、別の誰かが入るところを見てしまった。そこまで切迫していないし、このまま彼女をほっぽりだすとどうなるか分からない。

トイレは断念して、サツとお店の外に出る。外に出たところでウコンのドリンクを取り出して、軽く振る。蓋を開けて沙綾に差し出すが、彼女は顔をしかめた。「いいから飲みな。明日も朝から忙しいんだろ？」

「らあ〜い丈夫らつて。まだまだ飲めるし、日付も変わってないし……」

沙綾はそっくりながら、バランスを崩してちよっぴりよろける。転けないように手を出すと、手の中でドリンクが少しこぼれてしまった。それを見た沙綾は楽しそうに笑う。

この酔っ払いを大人しく連れ帰るには、まずはこっちがシャッキリしないと話にならない。すでに蓋を開けた方に口をつけ、一気に飲み干した。

初出 令和三年四月二十七日 NOVEL DAYSにて公開